

唐丹の民話・15「小白浜地区」

疫病祓いの おまじない



平成18年10月

唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ

目 次

—疫病祓いのおまじない・小白浜—

唐丹民話の再話著作にあたって	2
1. 小白浜の百万遍	3
2. ニンニクは万能薬	4
3. ハシカ神様送り	5
4. 百万遍念仏について（参考）	
(1) 仏教大事典より	5
(2) 日本仏教史事典より	6
5. 知恩寺について	6
6. 麻疹（はしか）について	
(1) 主な症状	7
(2) 潜伏期間	7
(3) 前駆期	7
(4) 発疹期	7
(5) 回復期	7

唐丹民話の再話著作にあたって

唐丹公民館の自主パソコンクラブ（設立：平成17年6月／名称：唐丹・愛ちゃんネットクラブ）では、パソコンによる文章作成を習得した証と民話を伝承する狙いを含めて民話の再話著作活動を実施しました。

文章作成の教材は、釜石民話の会（平成2年発足）の機関紙「釜石民話」を活用させていただきました。

この釜石民話の中から、唐丹に関り、かつ再話できるものを選び。その根底にあるものを変えないことを基本に「見やすく」、「読みやすく」、「分かりやすく」するために小見出しを付け、写真や絵図などを挿入。できるだけ、関連する歴史や実話を織り込みながら作成しました。

いつの日か、この冊子が誰かの目に留まり、唐丹にもこんな話があったのかと唐丹の「いにしえ」に想いをはせる一助になれば幸いと思います。

おわりに、この活用させていただいている民話は、釜石民話の会会員でありました唐丹町片岸の加藤ムツさんが採録（聴き取り）したものであり、第1集から第6集に掲載の民話の数は92編を数えます。

加藤ムツさんの民話を伝承したいという、この熱意と努力に敬意を表するとともに、故人となられました加藤ムツさんのご冥福をお祈り申し上げます。

なお、この物語の「疫病祓いのおまじない」は、釜石民話第2集「百まんべい（ん）について」を再話著作したもので、その釜石民話第4集「百万べい（ん）について」の原文は次のとおりであります。

昔、この地に流行病がはやったときには、もう故人になられたおばさん達、おつるばあちゃん、おまつばあちゃん、おせいばあちゃん達六人位が盛岩寺に集まり、大きな数珠をまわして「南無阿弥陀仏・・・・・・」と唱え鐘をたたき元締めところで小銭を一ケ盆に入れるのを百篇ぐらいまわし、その日は各自お赤飯とか煮しめを持ちより仏様に供えて後、つるきの海岸に来て仏様を拝み、お赤飯、煮しめを海に流したということです。

また家々の軒には、にんにくをつるし子供等の着物の上げにコロコロとにんにくを入れておいたり、首にハンカチでにんにくを包んで巻いたものだそうです。今はそんな行事もなくなってしまいました。

嬉石町でも人が亡くなれば、百万遍をやったものですが今はやる老人も居なくなり、百万遍もやらないと言うことです。私らも麻疹（ハシカ）なりなおる頃、麻疹神様をおくると言って町の四つ角に「たらべし」にお赤飯のむすびを三ケぐらいを「わらぞうり」のせて、後をふりかえらずに他人に見られないようにおいてきたものです。

話し手 川原セイさん

疫病祓いのおまじない

1. 小白浜の百万遍

昔(昭和20年前半ごろまで?)、疫病が流行ったときや災いを祓うときに、それぞれの部落の念仏講の人たちが、鉦をならし、念仏をとなえ、大きな数珠をまわしながら、まち外れまで行き、疫病のお祓いや災いを祓うために、百万遍をする習わしがありました。



(盛岩寺山門)

小白浜でも疫病が流行ったときは、おつるばあさん、おまつばあさん、おせいばあさんたち6人位が盛岩寺にあつまり、大きな数珠をまわして「南無阿弥陀仏・・・」ととなえ、鉦をたたき、数珠の元締めのところでお盆に小銭を1個入れ百編ぐらい回してお祈りします。

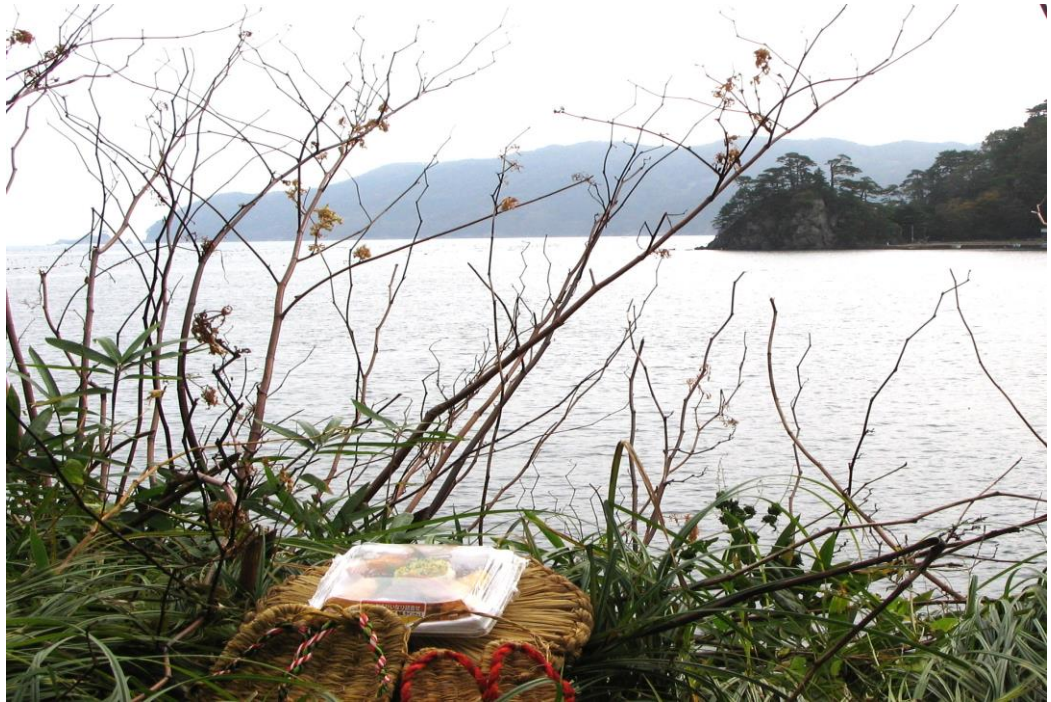
(数珠は、本堂新築のときから行方不明となっています。・・・俊禅和尚さん)



(本郷・庵寺福寿庵の大数珠)

その日は、おたがいに赤飯とか、煮しめを作り盛岩寺にもちより、仏様に供えます。

しばらくして、鶴来の海岸にゆき、赤飯や煮しめを仏様に供え、疫病がやむことを、ひとしきり（ひと時の間）お祈り。さらに、お供え物を海に流し、疫病祓いをしました。



（鶴来に供えられた・たらべしとワラ草履と供物）

2. ニンニクは万能薬

また、疫病除けとして、ニンニクを家々の軒に吊るし、子供などの着物の上げにニンニクを入れ、ハンカチや真綿にもニンニクを包んで首に巻いていたものでした。

釜石の嬉石でも人が亡くなると、百万遍をやったものですが、今は、やる年寄りも居なくなり、やらなくなりました。

小白浜でも、当時のおばあさん達も亡くなり、今は、そのような行事もなくなりました。



（漢方とニンニク）

3. ハシカ神様送り

私らも、麻疹（ハシカ）に罹って、熱や痛みや痒さなどに悩まされて治



（たらべし・ワラ草履・供物）

るころ、麻疹神様を送るといって、部落の四つ角に「たらべし」・（米俵＝稲ワラで編んだ米の入れ物＝その両わきの蓋）に赤飯のむすびを3個ぐらいにワラ草履をのせて手向け、後を振り返らず、そして、他の人に見られないように、急いで家に帰ったものです。

麻疹は、熱があっても冷やされず、暑いときに罹ると大変なものでした。冷やして、こじらせた人は後遺症を患い、苦しんだ人もいました。

物語は、おしまい

4. 百万遍念仏について（参考）

（1）仏教大事典より

浄土往生・先亡追善・攘災招福などのために、阿弥陀仏の名号を100万回唱えること。鎌倉末期、知恩寺の善阿空円が始めたという。

- ① 一人が7日または10日間に100万回念仏を唱えること。これを如法真修の念仏ともいう。
- ② 10人またはそれ以上の人が合唱した念仏の総計を100万とするもの。これを略法早（草）修といい、数珠の用い方によって夥頭（つぶつぶぐり）ならびに早繰（ざらざらぐり）ともいう。

略法早（草）修とは、1080珠（顆・か：まるい粒状の物を数える語）を送るごとに念仏を一唱し、100回大念珠を回すことにより、おたがいの念仏の功德が融通して百万の念仏の功德を受けることができるとする。



（盛岩寺：文化14年・百万遍供養塔）

(2) 日本仏教史事典より

自身の往生、死者への追善、除災招福の祈祷などのため、念仏を100万回となえること。

わが国では、平安時代以降、浄土教の興隆とともに盛んに修された。



個人が7日ないし10日間となえる場合と、集団で同時にとなえ、自他の念仏が相互に融通しあって、その回数が100万に及ぶとする場合とがあった。

一人で百万遍を満たす場合、数取りのため念珠が繰られたが、集団で行う百万遍念仏に大型の百万念珠がいつごろから用いられたかははっきりしない。

浄土宗で攘災のため百万遍念仏を行った最初は、知恩寺八世善阿空円と伝える。

(本郷お休場：宝暦14年・百万遍念仏供養碑)

善阿は元弘元年(1331)後醍醐天皇の勅(ちよく)により7日間百万遍念仏を修したところ疫病が終息したので、天皇から百万遍の寺号と弘法大師利剣の名号を賜ったという。

室町時代には百万遍念仏は「過去追善」「現在祈祷」に効験があるとされ、村々で百万遍数珠を繰って盛んに行われた。現在も寺院や村々で鎮魂、追善、農耕(虫送り・雨乞い)除災祈祷などの民族念仏として傳承されている。

5. 知恩寺について

京都市左京区田中門前町にある寺院。浄土宗の四箇本山の一つ長徳山功德寺と号し。百万遍と通称する。

法然房源空が住した「賀茂の河原屋」に始まると伝え、弟子の源智が知恩寺と改めた。

元弘元年(1331)疫病流行に際し、善阿空円が後醍醐天皇の勅を奉じて百万遍念仏を修し効験あったので、天皇より「百万遍」の号を賜った。以後、結衆10人が1080顆の大数珠を回す百万遍念仏が恒例となった。

日本仏教史事典より引用

6. 麻疹（はしか）について

（１）主な症状

小児の代表的な伝染病です。

発熱、鼻炎、結膜炎、せきなどのカタル症状、口腔粘膜のコプリック斑、発病４日目ごろから出現する皮膚の発疹が主な症状です。

（２）潜伏期間

感染から発疹が出るまでの期間は１０～１２日間ぐらいです。発症から治癒までの期間は、「前駆期」、「発疹期」、「回復期」に分けられます。

（３）前駆期

「前駆期」には、くしゃみ、鼻汁、せきなどの鼻咽頭炎の症状とともに発熱し、結膜の充血、目やになどの結膜炎症状をとめない、口腔粘膜にコプリック斑をみます。

（４）発疹期

熱が一度、平熱化したあと、「発疹期」に入ります。発疹はまず耳の後ろ、続いて顔、胸、手、腹部、足の順に出現し、２日ぐらいの間に全身におよびます。

（５）回復期

発疹と同時に再び体温上昇（３９～４０度）をみます。数日後に発疹は、出た順に退色が始まり、あとに褐色の色素沈着が残ります。発疹が出終わると解熱するのが普通です。（家庭医学大百科より引用）

参考の項・おわり

◎釜石の民話・第２集：百万編について

○話 し 手：川原セイさん／小白浜

○聴 き 手：加藤ムツさん／片 岸

●再話著作：掛川清子／小白浜地区（唐丹愛ちゃんネットパソコンクラブ）
：新沼 裕／本 郷地区（唐丹愛ちゃんネットパソコンクラブ）

●写真撮影者：掛川清子（同上）

●校正指導者：新沼 裕（同上）

●再話完成：平成１８年１０月